

### 3 信州の里山の価値と可能性

#### 【信州の里山の価値】

信州の里山の価値は、以下のように要約される。

- ① 奥山から低地までが凝縮された独特の里山景観
- ② 全国的にも特筆される、野生生物の多様性
- ③ 山間地の地形や種々の環境を巧みに利用してきた文化と民俗

これら3つの価値は、低平地にだけでなく山間地や高原にも里山が存在するという信州の里山の基本的な立地特性に深く関係している。たとえば、広大な高原に吹き渡る爽やかな風が清楚な山野草をゆらす様子や、日本アルプスの山々を背景にしてのどかな山村風景が広がるたたずまい（口絵1）などは、まさしく信州ならではの里山景観といえる。そして、それらは、多様な生物を育む独特の環境であるとともに、県内外の都市生活者にとって他所では味わえない大きな観光的魅力にもなっている。

里山に暮らす年配者に教えていただきながら復元したかつての里山風景（原風景）と現在とを比較してみると、この数十年間に里山がどのくらい大きく変貌してきたかがよくわかる（口絵3～6）。かつての里山では、生活者がそれを意識するかしないかはべつとして、上記の①～③の価値と日々の生活とは一体のものであった。しかし、今では日常生活そのものがこれまでの地域の自然や歴史から切り離されたところで変化してきたため、暮らしと里山の環境との結びつきそのものが希薄になりつつある。

上記にまとめた信州の里山の価値は、今日の里山のいたるところで見いだすことができる。しかし、「生物の多様性」にせよ、「景観」や「文化」にせよ、その価値の多くは、今の日常生活とは離れたところで、かつての長い歴史を通して育まれてきたものであることを忘れてはならない。現在認められるそれらの価値は、じつは歴史的に残存しているものであり、現在の里山のなかに潜在化しつつあるものなのである。つまり、現在の里山のなかに、かつての里山の原風景や諸々の価値が様々な程度に埋没しかけており、それらの記憶や名残が現在の里山の価値や魅力を支えているといつてよい。

#### 【里山の環境保全のために1 ～地産地消～】

今後里山の環境を保全してゆくためには、第一に、里山に住み、里山で仕事をする人々の暮らしが将来にわたって持続的に成り立つ条件がなければならない。それには、里山の自然を利用した生産物の品質向上や、生産効率を上げるなど生産者としての努力に期待する部分がある。しかし、国際的な市場取引がすすむ今日の農業や林業において、コスト競争だけで農林業を維持してゆくには限界がある。今もっとも必要なのは、地域内で食料と林産資源の自給率をいかに上げてゆくかということであろう。いわゆる「地産地消」の推進である。自給率を上げるためには、行政からの種々の働きかけとともに、消費者自らが生産者の暮らしを支え、ひいては里山の環境をまもるための具体的行動のひとつとして、地域の資源を選択的に購入し、また積極的に利用することが重要である。

#### 【環境保全のために2 ～里山を知ろう～】

第二に、現在の里山に潜在化している、信州の里山の価値（①～③）を、客観的もしくは科学的な立場からさらに掘り起こし、新たな光を当てる必要がある。里山のもつ価値や意味については、まだまだ知られていない研究すべきことがあまりにも多い。

里山には、たとえそこに暮らす人にとってはありふれた事象であっても、視点を変えてみると様々な意義

や魅力に満ちた素材がたくさん存在する。しかしながら、それらは来訪者にも、そこに住んでいる人たちにも、いまだ十分に認識されていないばあいが少なくない。地域の自然や文化を対象とした学び（環境学習）は、そこに住む人々には地域への愛着や地域に住むことへの誇りをもたらすことになる。また、来訪者には旅の醍醐味や出会いの喜びをもたらすものになる。里山の魅力を掘り起こし、それを味わうための方法として、たとえば 資料編 資料-2 に紹介した「里山歩き」のプログラムは参考になるだろう。また、これを応用し、来訪者にたいして、環境保全への配慮とともに持続的な体験プログラムを提供することができれば、新しい観光の形として、里山を対象としたエコツーリズムの推進にも結びつくだろう<sup>23)</sup>。前節でも述べたが、現在70歳以上になる年配者の体験を学ぶことも、里山の価値や意味を知るうえで、非常に重要なことである。

### 【里山の環境保全のために3 ～里山保全の担い手確保のための配慮～】

これからは、里山を農林産物の生産地としての意味だけではなく、地元の人や来訪者が身近な自然に触れることができる多目的な空間として、より幅広くとらえることが重要になる。

資料編 資料-3 「里山にたいする住民の意識」にまとめられているように、県民を対象とした意識調査結果では、若年齢層よりも高年齢層の人が、里山により高い関心をもっている傾向がわかった。ただし、里山での活動内容としては、これまで営まれてきたような農林業に関わる活動ばかりではなく、自然観察や憩い、もしくは癒しの場としての里山の利用など、関わり方にたいするニーズも多様化している状況がうかがわれる。この結果からすれば、これからの里山の環境保全活動の担い手として、まず里山への関心の高い高年齢者の人的パワーの結集に期待がかかる。そして、地元居住者以外の人に関わりを得ながら里山保全をすすめるためには、従来の農地や林地としての手入れをするだけでなく、自然観察や歴史探訪なども含めた様々な里山の活用メニューに関する情報提供が、今後活動を広げてゆくためにも大きな意味をもってくると思われる。

一方、若年齢層では、まず里山そのものに関心をもってもらうかを考える必要がありそうである。里山保全の担い手確保のためには、以下のように対象に応じたきめ細かな配慮のもとに、幅広い情報提供を行なう必要があると考える。

- ① 里山に関心の高い人（高齢者など）への多様な里山活動メニューの提供
- ② 里山に関心の低い人（若年齢層など）へ関心を高めてもらうための基本的な情報提供
- ③ 農業・林業の後継者に向けた彼らへの期待と支援、そして里山の多様な価値に関する情報提供
- ④ 里山の魅力や学術的な価値に関する幅広い情報提供

### 【里山の環境保全のために4 ～新たな発想による里山整備～】

多くの中山間地域で農林業にかつての活力がない現状において、農林業の視点だけから里山の環境保全をめざすのには無理がある。農林業以外の目的をもって、里山を活動拠点として適切に利用することは、結果的に里山の利用と保全において新たな可能性を切り開くことにもなる。

全国的にも、農作業や森林整備を含めて、自然とのふれあいの観点からの里山保全活動が様々に展開されている<sup>24)</sup>。県内においても、たとえば資料編 資料-1 「ユニークな里山保全活動」にまとめられている5つの事例は新たな発想による里山保全の動きとして参考になるだろう。それらの活動は、いずれも従来の農林業とは異なる立場から里山を活用し、魅力を探り、かつその価値を保全してゆくことを目指している。たとえば、森倶楽部21による安曇野市（旧明科町）の長峰山での活動では、蝶を指標とした森づくりを行なっている。里山の林に管理の手を入れることによって、そこにどんな蝶が出現し、またそれがどのように変化してゆくのかなど、行政とも協力しつつ、森林整備と自然観察と調査活動を行ない、楽しみながら里山保全活動を推進している。すでに述べたとおり、里山の環境保全を農林業従事者だけに押し付けるわけにはいか

ない現状からすれば、土地の所有者や農林業従事者以外の人たちが、新たな発想や目的のもとに、里山の林や農地などを利用し活動することの意義は、今後ますます大きくなるものと思われる。そして、そのためには、土地の所有者としての責任と、利用者としての制限について、環境保全という観点からより柔軟性をもったルールづくりが必要と思われる。

#### 【里山の環境保全のために5 ～エネルギー資源の供給地としての可能性～】

化石燃料の普及によって、エネルギー供給地としての価値を失ってしまった里山であるが、近年の地球温暖化防止対策の動きに関連して、かつて里山から採取していた生物資源が、バイオマス（生物由来の資源）エネルギーという再生可能な新エネルギーの一つとして脚光を浴びつつある。資料編 資料-4にまとめられているように、里山が木質バイオマスエネルギーの供給地として今後利用される可能性は十分に考えられる。同時に、木質バイオマスの利用が地域に新たな仕事をつくり出し、雇用を生み出す可能性もある。今後その可能性を高め、利用推進のためのなお一層の研究が必要である。

信州の里山には、ダイナミックな地殻変動帯としての地域性と、そこに暮らしてきた先人の知恵と技術と文化、そしてそこに暮らしてきた生物の進化の歴史が織なす一大絵巻がある。この報告書では、それらのごく一部分を紹介したにすぎない。そして、里山と里山の自然は、そこに人の暮らしがある限り、未来に向かって続いてゆくものである。時代の変化とともに失われてしまうものがある一方で、生き物のように再生と変化、あるいは進化をつづけてゆく部分が必ずある。将来を見すえた里山の環境保全とは、つまるところ環境配慮型の地域づくりそのものといってよい。今私たちにできること、そしてやらなければならないことは、「地域から失われてもやむをえないものは何か」、そして「地域から失われてはならないものは何か」を幅広い視野から吟味し、それらを見極めることである。それなしには、多くの人の合意を得つつ、里山の環境保全のために地域の力と知恵を結集することはむずかしい。変貌をつづける現代の社会環境と自然環境のなかで、本当の安心と安全のある暮らしとはどういうものなのか、環境という軸を中心において、私たち一人一人が、自分自身の生き方そのものを模索し、実践してゆくことが求められている。

## 文 献

- 1) 気象庁編（2001）平年値（統計期間：1971～2000年）CD-ROM。（財）気象業務支援センター発行。
- 2) 長野県植物誌編纂委員会編（1997）長野県植物誌，信濃毎日新聞社，1735p.
- 3) 長野県（2004）長野県版レッドデータブック動物編，321p.
- 4) 堀田昌伸（2003）2-4-2 浅川地域周辺の鳥類，「里山としての長野市浅川地域」長野県自然保護研究所研究プロジェクト成果報告 1：37-43.
- 5) 北野 聡（2003）2-4-3 浅川地域の魚類相，「里山としての長野市浅川地域」長野県自然保護研究所研究プロジェクト成果報告 1：43-46.
- 6) 浜 栄一・栗田貞多男・田下昌志（1996）信州の蝶，信濃毎日新聞社，287p.
- 7) 関東農政局長野統計情報センター（2006）「長野県の農林水産業の概要」
- 8) 2000年世界農林業センサス
- 9) 長野県林務部（2005）「信州の森林・林業の動向（平成17年度）」
- 10) 市川健夫・山本正三・斉藤功（1984）日本のブナ帯文化，朝倉書店。
- 11) 市川健夫（1991）信州学入門—山国と風土と暮らし—。信濃教育会出版部。
- 12) 富樫 均・浦山佳恵（2003）3-2 地域区分と歴史層序，「里山としての長野市浅川地域」長野県自然保護研究所研究プロジェクト成果報告 1：66-67.
- 13) 富樫 均（2003）3-9 浅川地域の主体—環境系のダイナミズム，「里山としての長野市浅川地域」長野県自然保護研究所研究プロジェクト成果報告 1：89-90.

- 14) 富樫 均・田中義文・興津昌宏 (2004) 長野市飯綱高原の人間活動が自然環境に与えた影響とその変遷. 長野県自然保護研究所紀要 7 : 1-16.
- 15) 環境省自然保護局編 (2003) 「いのちは創れない 新・生物多様性国家戦略」, パンフレット23 p.
- 16) 鷲谷いづみ・矢原徹一 (1996) 保全生態学入門, 文一総合出版, 270 p.
- 17) 長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック維管束植物編, 297 p.
- 18) 東淳樹・時田賢一・武内和彦・恒川篤史 (1999) 千葉県手賀沼流域におけるサシバの生息地の土地環境条件. 農村計画論文集 1 : 253-258.
- 19) 広木詔三編 (2002) 里山の生態学, 名古屋大学出版会, 333 p.
- 20) 財自然環境研究センター編 (2003) 平成14年度里地自然の保全方策策定調査報告書, 283 p.
- 21) 木村和弘 (2004) 「信州発棚田考 中山間地域 の新たな動き」, ほおずき書籍, 224 p.
- 22) 南 真二 (2005) 里山保全の法制度と展望. NPO/NGO 環境行政改革フォーラム2004年度総会 (予稿集) : 30-33.
- 23) 長野県環境保全研究所編 (2005) 特集エコツーリズムって何だろう?. みどりのこえ 31 : 2-9.
- 24) 財日本自然保護協会編 (2002) 里やまにおける自然とのふれあい活動一人とのふれあいの観点からの里地自然の保全方策策定調査報告書一, 日本自然保護協会報告書第93号, 315 p.